

「死んだ者が神の子の声を聞く」 井上隆晶牧師
ダニエル 12 章 1～4 節、ヨハネ福音書 5 章 24～30 節

①【キリストが最後の審判を行う】

ユダヤ人は、なぜイエス様を殺したのでしょうか。それはイエス様が「自分は神と等しい者だ」と主張したからであり、神はただお一人だと信じるユダヤ人にとってそれは耐えられないことだったからです。今日はそんなユダヤ人に、イエス様が自分は父なる神と同じ権威と命と力を持っていると説明されたところです。第一にイエス様は「最後の審判をする権威」を持っています。「父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。」（ヨハネ 5：22～23）父なる神様と、子なる神イエス様は、神様ですから同じ権威があり、同じ尊厳を持ち、同じ能力を持っています。神は完全だからです。少しでも欠けがあれば神ではなくなります。父と子に違いがあるとすれば、父は生んだ方であり、御子は生まれた者ということだけです。だから同じように尊敬しなければなりません。父にひれ伏すなら、御子にもひれ伏さねばなりません。父が一番偉くて、その下に御子イエス様がいるのではありません。昔「神様は分かるけれども、イエス様が神様だというのはどうも分からない」と言った信徒がいましたが、それはまったく逆です。人は神を見ることも、知ることも出来ません。そこで父なる神様はイエス様を通してご自分を表されたのです。だからイエス様を見た人は、神を見たことになるのです。イエス様の言葉、行動、そのすべてが父なる神の言葉、行動、意志であり、父も子も同じようにされるのです。このイエス様に裁きの全権は委ねられています。イエス様が栄光の座に着いて最後の審判をなさるのです。イエス様は人間になったので、人間のことが良く分かるからです。

●アメリカに世界で最も優しい裁判官といわれるカプリオ裁判官がいました。子供連れの父親が信号無視で罰金を命じられて法廷に来ます。カプリオ裁判官は子供を自分の横に座らせ、「お父さんは有罪ですか、無罪ですか」と聞くと、子供は「無罪です」と言います。「では一緒にビデオを見てみよう」と見ると、お父さんの乗った車は赤信号なのに左折しました。カプリオ裁判官はそれを見て「お父さんは信号無視をしましたね」というと、子供は「はい」と言います。カプリオ裁判官は「お父さんは有罪ですか、無罪ですか」と聞くと、子供は「有罪です」と言います。そこでカプリオ裁判官は「この子は正直で、親思いの子だから、罰金を減らしましょう」と言うのです。車の中で寝泊まりしていたホームレスの若い女性には、自分の基金から「あなたに～を援助しましょう」といいます。若い女性は涙を流して「ハグしていいですか」と言い、カプリオ裁判官をハグし、感謝

します。このような光景を見ていて心が熱くなるのは、彼の中にキリストの愛を見るからです。被告の罰金を自分が代わりに払ってあげるような裁判官は見たことがありません。

預言者イザヤはイスラエルの民に「あなたの造り主があなたの夫となられる。」(イザヤ 54 : 5) と語りました。旧約では神とイスラエルは夫婦関係で譬えられました。夫が神であり、妻がイスラエルです。しかしイスラエルは偶像のもとに走り、夫である神を裏切りました。そこでイスラエルは離縁され、バビロンの奴隷となったのです。しかしそんな妻を神は買い取ると言うのです。それが贖うということです。私たちも同じで、洗礼によってキリストと結ばれ、キリストと夫婦関係になったのです。キリストは花婿、私たちは花嫁です。私たちには罪と死という借金がありましたが、それを夫であるキリストが支払い、私たちはキリストのものとなったのです。最後の審判の時、私たちはキリストの前に立ちます。でもキリストが私の罪という借金を払い「あなたの罪を帳消しにします」と言われるのです。感謝です。

②【イエス様は死者に命を与えることができる】

第二にイエス様は「神と同じ命を持っている」ことです。「父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。」(ヨハネ 5 : 21) 神だけが死なない命、永遠の命をもっておられます。神は、誰からも命をもらう必要はなく、唯一すべての存在に命を与える方であって、尽きない命の源泉です。無から人間を創造された神は、一度存在したものが壊れても、もう一度存在させることは簡単なことです。ご自分の命を与えれば良いのですから。この創造の力と再創造の力を神であるイエス様も同じように持つておられます。朽ちない命の泉をご自身の中に持っているからです。だからイエス様も死者に命を与えることができるのです。それはラザロや、やもめの一人息子を蘇られたことから分かるでしょう。「子も、与えたいと思う者に命を与える。」というのは、私たちが生きるかどうかはキリストの意思にかかっているということです。

「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。」(ヨハネ 5 : 25) この場合の死んだ者というのは墓にいる死人のことではなくて、肉体は生きていても霊的な意味において魂が死んでいる人たちのことです。つまり神を知らない人たちのことです。この世を友とし、神抜きですべてを考え、生きている人のことです。しかし本当の命というのは「神」のことであって、神から離れた生活は命から離れた死んだ生活なのです。そのような者が聖書を読み、キリストの声を聞き、その言葉を信じて生き始めるならば、その人は生き返るのです。

③【死者はキリストの声によって墓から目覚める】

第三にイエス様には「死者を復活させる力」があることです。「驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子(キリストのこと)の声を聞き、善を行っ

た者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。」(ヨハネ 5：28～29) 聖書ははっきりと死者の復活があると言っています。これは先ほどの旧約聖書のダニエル書でも言われていました。「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。目覚めた人々は大空の光のように輝き、多くの者の救いとなった人々は、とこしえに星と輝く。」(ダニエル 12：2～3)

●友人の水口優明神父が『死者の祈り』についての解説でこんなことを書いていました。「永眠とは永く眠ると書きますが、この永くは永遠にという意味ではありません。…永眠という言い方には、…やがて起きるという意味が含まれています。死を眠りにしたのはキリストの復活です。」「よく勘違いされるのが、死者の魂は眠っていると解釈されてしまうことです。死者の魂は眠っていて意識を持つことがなく、最後の審判までじっとしているというのは教会の教えではありません。永眠者の魂は…意識を持ち、目覚めており、私たちとの愛の交わりを持っています。」「教会は救いや罪の赦しや安息といったものを…終わりのない経過としてとらえます。人は天国においても、聖なる者に向かって成長することをやめないのです。神は無限の神様なので、これで神による救いは終わったという時点というものがあるとは考えられません。罪の赦しに関しても、神の赦しを受けた時、突然罪が消えて無くなるわけではありません。私たちは次第に癒され、赦されてゆくのです。」

墓の中にいる人がキリストの声を聞くのですから、意識があって聞いているということになります。驚くのは「人は天国においても、聖なる者に向かって成長することをやめない」という教えです。プロテスタントは死んだら終わりだ！といっています。でも伝統的な教会は違うといっています。実際、復活してキリストの似姿に変化するので、成長することになります。死んでもまだ変われる、成長し続けるのです。

ところでダニエル書には、目覚めた人々は大空の光や星のように輝く、と書かれています。パウロはもっと詳しく「天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあって、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。死者の復活もこれと同じです。」(I コリント 15：40～41) と語り、天国では人はそれぞれ違う輝きになると言っています。それはこの世をどう過ごしたかで決まるのだと思います。この世の人は死んだら皆天国に行き、同じ報いを受けると思っているかもしれませんが、そうではないのです。やはり一人一人輝きがみな違うのです。天国にはすべての人が入れられるでしょう。でも礼服を着ない人が追い出されたように、神の光に耐えられない魂は、自ら出てゆくことになるでしょう。神を主人としてこの世を生きなかった人は、天国で神に仕えることができるのでしょうか。この世も来世も同じなのです。時間のある内に、神に仕える練習をしましょう。そして来世で輝くものになりたいと思います。